

機関番号：16101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820028

研究課題名（和文） 明代白話小説における手法の展開

研究課題名（英文） The development of narrative techniques in Ming vernacular novels

研究代表者

田中智行 (TANAKA TOMOYUKI)

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 准教授

研究者番号：50531828

研究成果の概要（和文）：

明代の白話長篇小説『金瓶梅』の小説技法を検討することにより、この作品の中国小説史における位置を明らかにし、また作者の創作手法や表現意図を分析しようと試みた。具体的にはまず第三十九回を取り上げ、この回が様々な点において前後半が対偶となるよう構成されていることを明らかにした。次に清・張竹坡による『金瓶梅』の小説手法に関する批評に着目し、その批評の特色を分析した。また『金瓶梅』の小説手法に関する研究史を整理した。これらの成果は雑誌論文や研究会報告、また申請者の博士論文の一部として公表した。

研究成果の概要（英文）：

By researching the narrative technique of Ming vernacular novel Jin Ping Mei, I attempted to position this novel in the history of the Chinese novel as well as to analyse the author's compositional approach and expressive intention. Concretely speaking, first, I researched the structure of Chapter 39 and proved that this chapter is, in numerous aspects, constructed in such a way that the first and second halves contrast with and reflect each other. Second, I researched the commentary on the technique of Jin Ping Mei by Qing critic Zhang Zhu-po and analysed the characteristics of his commentary. In addition, I wrote a brief history of modern research on the same theme. These accomplishments are published in the form of an article on academic bulletin, two presentations at conferences, and my doctoral dissertation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	720,000	216,000	936,000
2010年度	650,000	195,000	845,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,370,000	411,000	1,781,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：各国文学・文学論

キーワード：中国古典文学、白話小説、『金瓶梅』、小説手法、小説批評

1. 研究開始当初の背景

本研究では明代の白話長篇小説『金瓶梅』の小説技法を検討することにより、この作品の中国小説史における位置を明らかにし、

また作者の創作手法や表現意図を分析しようと試みた。

『金瓶梅』はいわゆる四大奇書の中で成立年代が最もくだる作品であり、他の三作品（『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』）がそれ

ぞれ芸能に源流をもつ長い前史を有しているのに対して、大部分は一人の作者によって創作されたと思われる。作者は先行作品から多くを学びつつも、それらに見られない斬新な手法を用いているから、本研究課題「明代白話小説における手法の展開」を考究するには格好の題材であるといえる。

このような作品であるため、その創作手法については古くから議論がなされてきているが、論者によって意見の分かれる論点も少なくない。例えば本研究に関わるものとしては、以下のような諸点が挙げられる。

- ①作中の社会描写を淫猥描写から切り離して前者のみを高く評価する態度の是非
- ②作中に描かれる世界から作者が批評的距離を取れていないとの批判を誘発する作品の特質を如何に評価すべきか
- ③作中の人物描写が前後で矛盾していて性格の発展が根拠づけられていないという批判の当否
- ④登場人物が歌で感情をあらわす箇所を小説表現としてどう捉えるべきか
- ⑤作中に多くの先行作品の引用が散りばめられている点をどのように評価するか

2. 研究の目的

上にも述べたように、『金瓶梅』の文学史的位置づけを検討するにあたって、創作手法の検討は欠かすことのできない一視座である。一方で、小説表現における手法は言語における文法のような位置にあるともいえ、手法に注目することで作者の表現意図をより合理的に論じられるという利点もある。また、新たな手法が生み出された背景には、従前の手法においては十分に表現されることがなかった、新たな手法によってこそ効果的に表現されうる何らかの認識が存在していたことが予想される。ある手法の使用を指摘するに留まらず、それによって目指された表現効果を把握し、作者の創作態度にまで迫ろうとするのが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者が大学院生であったころから取り組んできた『金瓶梅』研究の一環でもあり、従来の成果の上に立って、更に以下のような研究方法による考察を行った。

まず、『金瓶梅』第39回の精読を通じて、同回の構成を論じ、この作品の構成面での技法運用を具体的に指摘した。第39回は一見して明らかな対偶構成をとっているが、その対偶構成により如何なる表現効果が目指されており、細部の表現と回全体の構成とがどのように有機的に関連しているのか（或いはいないのか）に特に注目した。それにあたり、

小説本文の精読はもとより、本文に引用される諸資料や、崇禎本の批評者や張竹坡による細部への批評にも目を配り、総合的な考察を心がけた。

また、『金瓶梅』における小説手法を詳細に論じた最初の批評家といえる清・張竹坡の『金瓶梅』批評について、初歩的な検討を行った。張竹坡の議論としてもっとも網羅的である「批評第一奇書金瓶梅読法」の訳稿（未発表）を作成し、他の文章と併せて彼の批評傾向を論じた。またそのような傾向の具体的な表れとして、作品の具体的な場面についてみられる張竹坡の独特の解釈を例示しようと試みた。

この他、近代以降の『金瓶梅』の小説手法に関する研究史を整理した。これに際しては、中国や日本の研究はもとより、従来日本では十分にその成果が取り入れられてきたとはいえなかった英語圏での研究にも十分に目を配るように心掛けた。

4. 研究成果

(1) 『金瓶梅』第三十九回の構成

まず『東方学』誌に発表した「『金瓶梅』第三十九回の構成」においては、『金瓶梅』の小説構成法、特に第三十九回に顕著な回内部の対偶構成を論じた。

この回は『金瓶梅』において大きな意味をもつ事件が起きるとされる「九」回系列に属する長編小説中の重要な一齣でありつつ、一方では緻密な対偶構成により前後半が照応し支えあっており、一つの回としての独立した表現構想をも持った回となっている。

回の前半には家の外で男性により行われる羅天大醮（道教）が描かれ、儀礼文書や符の列挙によって神々の秩序だった機構が浮かび上がる（社会性）。対して後半に描かれるのは、婦人の部屋で女性たちだけにより行われる宣卷（仏教）である。そこで語られる宝卷においては、千金小姐の懐胎と出産とが韻文で印象的に描かれている（身体性）。また前後半はそれぞれ、西門慶の二人の息子の未来を暗示していると思われる。

小説手法においても両者は、語り手が態度を表明しないまま宗教的テキストを長く引用して読者を宙吊りにする点で共通し、表現構想の同軌が対偶構成を支えている。前後半のトーンの落差は、道士が官哥の長生と富貴とを願い送り届けた道服を、まったく異なる角度から論評する女性たちの視線に象徴的に現れている。そこでは作者らしい複眼的な表現が対偶構成の中で巧みな効果を上げており、本回の構成が作者の表現志向にも適した形式であったことがうかがわれる。

このように『金瓶梅』の作者は小説を意識

的に構成し、且つそのような手法の運用によって、細部の表現がより引き立つような工夫をしていることが分かる。

この内容は、東京大学大学院人文社会系研究科へ2010年9月に提出した博士論文『金瓶梅』の創作手法論的研究』にも第四章としておさめた。

(2) 張竹坡の『金瓶梅』批評について

上記博士論文第二章「張竹坡の『金瓶梅』批評について」では、古典的『金瓶梅』論の代表として張竹坡（一六七〇～九八）の『金瓶梅』批評を取り上げた。

自らも「世情の書」の創作を試みて挫折した経験語る張竹坡は、作者の立場に視点において『金瓶梅』を完全無謬のテキストとして扱い、一見単純な錯誤と思える箇所すらもすべて作者の意図の反映として理解しようとする。

全体構成を透視することによってこそ作者に「騙され」ずに済むのであると述べる張竹坡の読み方の然らしめるところ、作品を読み進める際に読者が抱く素朴な感興よりも、前後と脈絡づけて或る場面の位置づけを論じることが優先されがちとなる。

こうした張竹坡の解釈姿勢は同じ箇所に対する崇禎本と張竹坡の批評を読み比べることによっても浮き彫りにすることができる。たとえば西門慶の改心を祈って夜香を焚く妻・呉月娘の姿を西門慶が偶然みつけて感動し、夫婦が仲直りをする場面がある（第二十一回）。翌朝潘金蓮が「夜香を焚くなら黙って焚くものだ」と嫉妬しやっかむ箇所について、崇禎本の批評が潘金蓮の毒舌ぶりにたじろいでいるのに対し、張竹坡は同じ台詞に触発されて、前後の場面に証拠を求めた上で、潘金蓮の言う通り月娘の祈祷は芝居であったとの解釈をとる。

このように張竹坡の読み方は或る意味で客観的といえる反面、読書体験における素朴な驚きは表面に現れることが少ない。

(3) 『金瓶梅』の小説手法に関する研究史

上述の博士論文序章においては、近代以降における『金瓶梅』の小説手法に関する言説を整理した。そこに見出される論点の一部はすでに「研究開始当初の背景」欄に箇条書きした如くである。

具体的には例えば、陳独秀・錢玄同・胡適の三人が「新青年」誌上で取り交わした書信における議論（1917～18）や、「文芸報」上にて闘わされた李長之と李希凡のリアリズムをめぐる議論（1957）などを詳しく取り上げた他、パトリック・ハナン、デイヴィッド・ロイ、アンドルー・プラックスら英語圏の研

究者たちの業績を紹介した。

(4) 博士論文について

上記博士論文は、本科研費による研究以前から継続している研究代表者の研究をまとめたものであるため、上に述べた以外の部分の概略を以下に示して、博士論文としてまとめられた研究内容の全体像を示す。

詞話本と崇禎本とを比較すると、両者の快樂観ともいうべきものに明らかな差がみられ、世俗的快樂の正体を暴きその忌まわしさを明らかにするという論調の崇禎本に比して、究極的には取るに足らぬが一般的な人間は心を揺すぶられ我を忘れてしまうものとして（男女の）「情」や「房中の事」を捉える姿勢が詞話本には顕著である（以上博士論文第一章）。

またときに作中人物像の前後矛盾が指摘される『金瓶梅』であるが、作者は、人物の一貫した強固な性格やその発展よりも、家庭や社会の諸関係にあって人間が見せる多様な心理の一つ一つを読者が実感できるように描写する傾向が強く、そのような描写のためには相応の工夫を怠っていない（以上博士論文第三章）。

さらに作者は、描写や引用などの工夫によって、作中人物の感情を衝き動かしている「気分」に読者までも巻き込み、その上で読者がその「気分」を客観視もするよう小説展開を工夫している。それにより例えば、読者に酒色財気の人を惑わせる様を実感的・体験的に理解させるという新たな小説表現が試みられている（以上博士論文第五章）。

以上の三章に加え、本報告書「研究成果」(1)・(2)で述べた本科研費による成果をそれぞれ第四章・第二章として併せたものが、博士論文の本論部分を構成する。

博士論文の結論部においては、序章において整理した研究史（本報告書「研究成果」(3)参照）において『金瓶梅』評価の課題として提示した論点（本報告書「研究開始当初の背景」参照）に対し、各章で得られた知見がどのように寄与できるのかという観点から全体を総括し、且つ、愛情や肉親の情といった人間の感情についても酒色財気への惑溺と同じ要領で客観視が促される点につき補足的に論じて、作者が酒色財気に溺れる心性をも一種の人間性として捉えていたのであると結論づけた。また『金瓶梅』の、読者を作品世界に自然に遊ばせることにより内的な真実を実感的・体験的に悟らせる手法についてあらためて論じ、読者の参与を求める作品という『金瓶梅』の性格を明らかにした。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ①田中智行「『金瓶梅』第三十九回の構成」、
『東方学』第119輯、2010年、査読有、pp. 58
～72

〔学会発表〕(計2件)

- ①田中智行「『金瓶梅』第三十九回の構成」
徳島大学国語国文学会第四十回研究会、
2009年7月25日、徳島大学
- ②田中智行「張竹坡の『金瓶梅』批評について」平成22年度四国東洋学研究者会議、
2010年9月17日、高知共済会館

〔その他〕

博士論文「『金瓶梅』の創作手法論的研究」
を2010年9月、東京大学大学院人文社会系
研究科に提出、2011年3月に博士(文学)の
学位を授与された。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 智行 (TANAKA TOMOYUKI)
徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・アンド・
サイエンス研究部・准教授
研究者番号：50531828

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：